

地域社会における子育て機能の検証

林 俊 光

【抄録】

少子化現象に関わる大人の意識の変貌は、地域社会における子育て機能をも変化させてきた。そのような状況の中で、京都における夏の地藏盆の行事は、そのような子育て機能を変わずに持ち続けている一つの表れであるといえる。街の辻辻に地藏尊が祀られ、さらにその地藏尊が子どもの守護神的面をもっているという点も考え併せると、地藏盆という行事は、京都における大人が強く持っている子どもの保護意識の表れの一つと考えられる。

本稿においては、今日薄れつつあるコミュニティ意識、さらには、地域社会における子育て機能と実践及び、町内という地域社会の住民によって行われている地藏盆という行事を通して大人の意識の中の子どもの健全育成について考えたい。

キーワード：地域、子育て、地藏盆

序

今日の我が国における児童健全育成は、所謂社会科学としての社会福祉の一領域の児童福祉の範疇で、その定義が、児童福祉法が制定されて以来比較的曖昧なままで、とりわけ注目されずに推移して来た経過があるといえよう。そして、その具体的展開として児童健全育成施設としての児童厚生施設が設置されている。しかしこのような人為的人工的施設を設置・活用という形態をとった健全育成は、どこまでもそれら人工的媒体を利用するもので、どこまでも媒体利用という形での限界を有しているといえる。

我が国における子どもの健全育成は、「16世紀の中頃に、フロイスは子育てにおける温和な方法を称賛し、『決して懲罰を加えず、言葉をもって戒め、6、7歳の小児に対しても70歳の人に対するように、真面目に話して譴責する』と、鞭による子供の懲戒の権利を天主から親に授けられているとする自分達からみると不可能に思えるこの方法に関心を寄せている。そして、この方法の違いが、揺籃を使って幼児を眠らせ、小さな車を使って歩行を教えるヨーロッ

パに対して、このような道具を一切使用せず『ただ自然のあたえる援助を使うだけである』ことに原因していると考えていた。また、明治になってから訪れたモースもまた『世界中で日本ほど、子どもが親切に取扱われ、そして子どものために深い注意が払われる国はない。ニコニコしている所から判断すると、子どもは朝から晩まで幸福であるらしい』と述べている。これらの外国人の目に映ったのは、一般庶民の子育てであったと考えられ、極一部のものしか読み書きができなかったであろう時代を経て親から子へ営々と伝承されて来た⁽¹⁾のを源流としているといえる。

1

地域とは「地形や行政管轄などの観点から、なんらかの意味でひとまとまりのあるものとして他と区別される土地」⁽²⁾とされ、「一定の地域に成立し、利害を共通にする生活共同体」⁽³⁾を地域社会と説明している。

現代社会は、工業化・情報化・高齢化等によって急激に変化し、地域社会における共同意識や連帯意識を脆弱化させた。それは、地域社会に住民の福祉に関わる社会的・経済的・文化的問題が発生拡大し、住民の福祉が阻害される状況に陥ることを意味している。したがって、その対応としてのコミュニティの形成が示唆されるのである。コミュニティとは、地域性、共同性、社会的相互作用などについての考え方が人によって違い、完全ではないとしつつ「一定の範囲における地域社会の住民が、その地域のもつ特性（風土、歴史、文化、政治形態など）を前提に営む生活の共同」⁽⁴⁾と定義づけている。また、「生活環境を等しくし、かつ、それを中心に生活を向上せしめるようにする共通利害の方向で一致できる人々が作りあげる地域集団活動の体系がコミュニティの発現形態である」⁽⁵⁾とし、そこに4つの意味が含まれると指摘している。第1は、基本的条件としての地理的条件（範囲性）、第2は、人間間における日常生活上の相互連関（相互作用）を通じて生活要求が充足されること（共同性）、第3は、地理的範囲で充足率を高める意味での社会的資源（生活環境や施設の体系）の存在、第4は、生活利害の共通性（同じ土地に共属しているという感情の高まり）、である⁽⁶⁾。ただし、このような新しい形でのコミュニティは、伝統的な村落共同体とは一致しないとしている⁽⁷⁾。

中央社会福祉審議会が示した答申「コミュニティ形成と社会福祉」において、コミュニティ形成の必要性を次のように述べている⁽⁸⁾。

急速な経済成長やこれに伴う地域間・産業間の人口移動は、技術革新の進展や情報化社会の進行とあいまって、地域住民の生活様式や生活意識の変革をもたらし、また、生活の自然的・社会的環境の変化をもたらし、これまで地域住民の生活のよりどころとなっていた既存の地域共同体は、このような変革に対応することができず解体の方向をたどりつつあるが、これに代わる新たな地域社会が形成されないまま、住民の多くは孤独な不

安な生活を余儀なくされている。

一方、核家族化の進行は、家族の生活保障機能を縮小し、これに代わる社会サービスの必要性が増大している。子どもの養育、家族の健康、事故・災害の対策、変化する環境への対応、家庭内外のさまざまなトラブルの解決などについて、かつてのように近親や近隣の相互扶助・指導を期待することは困難になっており、新たに社会的な方策を講ずることが必要になっている。

これから形成されるべき新しい地域社会、すなわち「コミュニティ」は、まさに以上のような地域住民の諸要求を充足するものでなければならず、そしてこのようなコミュニティの形成なくして国民の生活福祉の向上を期することはできない。

そして、形成の基本的論理として

- 1) 生活優先の原則の貫徹
- 2) 生活の高密度の確保
- 3) 生活・地域情報の確保

の 3 点をあげ、さらに、コミュニティ形成の条件として次の 4 点をあげている⁽⁹⁾。

- 1) 同一地域に生活している人々の集群であること（地理的規定）
- 2) その人々の生活上の相互関連（相互協力）の体系であること（相互作用的规定）
- 3) その生活相互行動を一定地域内で果たさしめている生活環境諸施設の体系であること（施設的规定）
- 4) この人々が持つであろう生活利害と行動の共通性を生み出す可能性に満ちた人々の共通行動体系であること（態度的規定）

2

近年の我が国の状況を表す言葉が、高齢化と少子化である。高齢化は、

- ①戦後のベビーブーム後の出生率の低下
- ②寿命の伸び
- ③最近の出生率の低下

を原因として、

- ①現在の高齢化の水準が先進諸国とほぼ同じである
- ②我が国の高齢化は昭和 40（1965）年から目立ち始め、その歴史は先進諸国と比べて新しい。
- ③高齢化のスピードが非常に早い。
- ④高齢化の将来到達水準が先進国のなかでも最も高くなる可能性がある。

という 4 つの特徴をもっている⁽¹⁰⁾。

一方、少子化については、第2次ベビーブームの時期（昭和46～49年）以来ほぼ毎年着実に少子化が進行している。出生児数についてみると、第2次ベビーブームの昭和48年に209万1983人が生まれているが、平成11（1999）年にはその56%に当たる117万7663人に減少し、合計特殊出生率も2.14から1.34へ落ち込み、人口置換水準の2.08をはるかに下回っている。

因に、この数字を第1次ベビーブーム（昭和22～24年生）所謂団塊の世代のそれと比べてみると、出生児数では、僅か44.2%でしかない。もちろん合計特殊出生率も当時の4.32には遠く及ばない。

そして、世帯動向からみても、25年前の昭和50（1975）年には、18歳未満の子どものいる世帯が、全世帯の53.0%であったのが、平成9（1997）年には30.0%に減少している。これの背景には、高齢者世帯の増加があるものの全世帯の70%には子どもがいないというのは大変な状況であるといえる。

このような現象の細部の検討は他稿に譲るが、核家族の増加や世帯構成人員の現象など、児童の家庭や地域社会の環境の変化は、地域社会における人間関係の希薄化を生み、子どもにとっては、心身の成長発達にとって必要な体験不足、家庭における親の過保護・過干渉、地域における遊び場の問題などとなって影響をうけているのである。

子どもは、その年齢と共に経験・体験の範囲・領域を広げていくものである。しかしながら「全体的な児童数の減少傾向が兄弟関係や地域の児童の関係を希薄化して遊び相手をなくし、都市化の進展は、児童のための自然の遊び場を不足させ、特に都市部においては、児童の遊びに必要な空間の確保さえも困難となっている。さらに、学歴社会と豊かな物質社会は、遊び時間と遊び内容を大きく変化させている」⁽¹¹⁾さらに、子どもは、地域において様々な活動を通して得られる地域住民との交流や、連帯意識を深めていく機会ともなる生活体験をする場をも失うことにもなった。

現在、地域における児童健全育成施策として事業として実施されているものをあげるとつぎのようなものをあげることが出来る。

1. 児童厚生施設

(1) 児童館

①小型児童館

②児童センター

③大型児童館（A型・B型・C型）

④その他の児童館

(2) 児童遊園

2. 放課後児童健全育成事業

3. 児童環境づくり基盤整備事業

(1) 都道府県児童環境づくり推進機構整備事業

①児童環境づくり運営協議会の設置・運営

- ②家庭や子育てに関する啓発・普及，相談体制の充実強化
- ③子育て支援サービスの調査，情報収集提供
- ④児童環境づくりのための指導者等の育成
- ⑤親，学生等に対する子育てセミナー等の開催
- ⑥乳幼児事故防止活動の実施 等
- (2) 児童環境づくり対策等事業
 - ①児童環境づくり対策事業
 - ②児童育成基盤整備等推進事業
 - ③地域組織連絡協議会助成事業
 - ④児童環境づくり推進委員会の設置 等
- (3) 家庭支援相談等事業
 - ①家庭支援電話相談（子ども・家庭110番）事業
 - ②家庭支援推進モデル事業
- (4) 育児等健康支援事業（地域の実情に応じて①～⑧から選択実施）
 - ①地域活動事業 ②母子栄養管理事業
 - ③乳幼児の育成指導事業 ④出産前小児保健指導事業
 - ⑤産後ケア事業 ⑥思春期における保健・福祉体験学習事業
 - ⑦健全母性育成事業 ⑧その他母子の健全な育成に資する事業
- 4. 年長児童育成の街試行事業
- 5. 児童文化の普及等

これらの事業は，現在の子どもの問題に対応しさらに「積極的に家庭や社会生活を心ゆたかなゆとりとふれあいの子育ての環境として整備することが現在最重要課題となっている」と述べている⁽¹²⁾。

3

児童福祉法で規定されている児童福祉施設は，それぞれその種別によって目的と対象を規定し設置・運営されている。しかし，それらの施設が，どこかの地域社会に設置・運営されている限りにおいて，その地域の社会資源の一つと考えることができる。そのように考えるならば，それぞれ地域に存在している施設は，それぞれの地域において専門家集団として持っている知識や技能を利用者のみを対象にするのではなく，地域社会にもその知識や技能を生かしていくことが今日求められている。

乳児院は「乳児（保健上その他の理由により特に必要のある場合には，おおむね2歳未満の幼児を含む。）を入院させて，これを養育することを目的とする（児童福祉法第37条）」施

設であるが、入院措置児のみならず、ほぼ同年の子どもを育てている地域の母親にも目を向け、地域社会における児童健全育成の一つとして幅広くとらえて実践している活動の事例を紹介しておきたい⁽¹³⁾。

《概要》

目 的：母親と子どもで参加し、集団の中での遊びや親同士の交流を通し、より良い成長を目指す。

対 象：0～3 歳の子どもとその母親とで、集団遊びを希望し子育てに関心を持っている人。

開室日：毎週木曜日 午前 10 時～11 時 30 分

祝日及び 8 月、年末年始は休みとする。

場 所：乳児院プレールーム、または養護施設のホールなど。

内 容：毎週、乳児院保母（ピヨピヨ教室担当スタッフ 4 名）による設定保育を、母子保育として行う。

設定内容は月初めの保育会議により決定し、保育案に基づいてすすめる。

毎月最終週には、その月のお誕生会を行う。

保育後はおやつとし、ほぼ毎回乳児院調理より手づくりオヤツを提供する。調理師栄養士による食事指導、作り方説明等も行う。

年 1 回、母親を対象としての学習会・講演会等を開催する。

《実践報告》（抄）

- ① 核家族化の進行、ニューファミリーの集まりは、新しい土地での生活になじめず、精神的、情緒的に不安をきたし、深刻な問題を起こしている人も見受けられます。

人間関係をうまくむすべない若いお母さん、子育てに悩みながらも相談するところがなく戸惑っているお母さん、家族の問題でノイローゼ気味の人等々、身近なところで意外に多くの人々の悩みを知りました。

以前から、乳児院の機能の一つとして、“子育てサロン”的に地域に解放できるのではないかとの意見もあり、院内でけんとうも重ねてきました。

そこで、すでに親子教室を実施され、効果をあげていられる仙台乳児院を見学、学習することからはじめました。

この研修、学習をもと、し、母と子のふれあい保育を実施することとなりました。

対象は 0 歳から 3 歳までの未就園児とその母親とし、“地域の中で子育てを”テーマにか、げました。

- ② 開室、平成 4 年 4 月、第 1 回目より大変な人数（親子 32 名、乳児院児、保母を含め 40

人以上)となり、乳児院プレールームでは場所が狭くて対応できなくなり、併設している養護施設ホールを使用させていただくことになりました。

「引越してきたばかりで遊ぶ友達がいないんです。ぜひ参加させて下さい。」と新しい仲間も誕生しました。

お母さん方にも勉強の場をと児童相談所より心理判定員を派遣していただき「子育てについて」の講演を聞く機会も設けました。子どもたちは別室で保育をし、じっくりと聞けるように配慮もしました。

母子の反応は、回を重ねる度に、様々な場で伺えましたが、母親の子育てに対する考え方の違い、価値感の違いなどで、参加の態度は様々でしたが、母親同志、子ども同志の繋がりが生まれ、……活発にコミュニケーションが進展しつつある様子も伺えました。

今後の課題としては参加児の月齢のばらつきがみられ、保育をどうしていくか、又、今まで保母が中心として保育をおこなってきましたが、お母さんにも絵本の読みきかせ等保育に参加してもらい、特技を発揮していただいてより活発な保育の場としていければと願う一方、子育てについてよりコミュニケーションを密にし地域に根ざしてこそ親と子、地域と施設が共に育ち合えるのではないだろうかと考えています。

スタートした1年目に、1学期15～20組2学期3学期共に25組以上の参加があり、初年度最終的には45組が登録をしている。さらに、5年目の平成8年度の参加状況を見ると、延べ38回の開室に、親子合計4593人(平均120名の親子)が参加しており、これに毎回約20名の施設の子どもと職員が加わっていくのであるから毎回大凡140名の参加である。なお、平成12年度には211組が登録している。

また、5年後の同園の機関紙には次のように述べられている。

「はじまって5年が経過しようとしている。手さぐりからはじまり、手直し又手直しと軌道修正をおこないやっと一つのものが出来上った。利用者も毎年増加し、すっかり地域事業として定着している。職員のたゆまない努力がその陰にあることはいうまでもない。加えて利用する母子の参加への意欲、期待、よろこび、そして、目に見える保育効果が私たちを刺激し、次回への活力となるのである。(略)大勢の方々が様々なニーズを求め、施設を利用していただけることは、私たちの仕事にとって大きな道しるべとなり、明日の目標を与えていただいているともいえよう」⁽¹⁴⁾

この教室が、施設解放のひとつのパターンとして地域に向けて開設したことと、地域におけるニーズが合致した結果といえる。ここでは、地域における児童健全育成の一形態と考えたい。

4

地蔵菩薩は、「仏滅後、弥勒菩薩がつぎの仏としてこの世にあらわれるまでの、五濁悪世の無仏世界の衆生の救済を、仏からゆだねられた」ところに特色を持ち、あらゆる場所に身を変えてあらわれ、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天など六道の衆生を救うといわれている⁽¹⁵⁾。

この地蔵信仰の我が国における成立は、他の仏・菩薩のそれにくらべてひじょうにおくれ10世紀の天台浄土教の流れでようやく開花した。

初期は、地蔵信仰は地獄抜苦に特色を持っていたことから、悲観的来世の信仰が未発達な時代には、貴族達の関心と呼ばず、現世利益的側面で当時盛んだった虚空蔵信仰と対の形、つまり、虚空蔵信仰と共通の場で受け入れられたとも考えられている⁽¹⁶⁾。

奈良朝時代に萌芽を切り開いた地蔵菩薩の信仰は、平安朝期にはいると共に、強く密教と結びついて愈々益々隆盛となった。そして、この時代の地蔵菩薩の信仰は、弘法大師はじめその他多くの顯密の大徳たちの普々ならぬ努力苦心の結果、これまでとは格段の相違を認め得る進展振りを示したことは、絶対に間違いない事実である、と述べている⁽¹⁷⁾。

また、「嘉祥三年五月丙戌莊嚴清涼殿安置金光明經地蔵經各一部及新造地蔵菩薩像一軀 請僧修先皇七七御齋會」と「文徳實録」にあるように、当時国家經典ともいうべき四天王護国思想を中心とした金光明經と共に、新造の地蔵菩薩像と地蔵經典とが先帝（仁明天皇）の七七日の齋會に奉納・安置されたのである。これは、「地蔵教の普及発達史上における画期的出来事」⁽¹⁸⁾といえる。

そして、貴族社会中心であった浄土教が、11世紀になって、地方の民衆の間にも浸透するようになり、併せて地蔵信仰も民衆の間にひろく定着するなり、『地蔵菩薩靈驗記』『今昔物語集』地蔵説話にこのような民間地蔵信仰の姿が最もよく伝えられている⁽¹⁹⁾。

地蔵菩薩は、現在も六地蔵という言葉で表されるくらいポピュラーで身近な仏として存在しているが、六地蔵信仰は、「敦煌の壁画や中国の説話集にまったくあらわれず、日本の天台や真言の僧によって考え出されたと思われる」⁽²⁰⁾といわれている。六地蔵という言葉が登場してくるのは「今昔物語集」巻17第23話のたまおやのこれたか玉祖惟高についての説話であり、ここでそれぞれ六地蔵の持ち物を書き分けたのが最初とされている。京都においての、現在の六地蔵の始まりは、保元2（1157）年にそれまで伏見六地蔵の大善寺に安置されていた6体の地蔵尊像を理由は、皇城镇護の意味合いから、あるいは地蔵菩薩の大慈大悲の誓願深重の有り難さを一般庶民に知らしめるため、常時交通の最も多い、と定かではないとしながらも、京都に通じる6本の街道筋の入り口に一体ずつ分祀したといわれている。現在も多くの参詣者がおとずれているこの六地蔵は次の6か寺である。

①鞍馬口・上善寺：鞍馬街道 ②山科・徳林庵：東海道 ③六地蔵・大善寺：奈良街道

- ④鳥羽・浄禅寺：大阪街道 ⑤桂・地藏寺：山陰街道 ⑥常盤・源光庵：周山街道

なお、六地藏は京都のみの固有の信仰形態ではなく、同様の六地藏が東京にもある。「今日いふ東都の六地藏は、瑞泰寺（本郷）、専念寺（駒込）、浄光寺（日暮里）、心行寺（池端）、地藏堂（上野）、正智院（浅草寺雷門内）」⁽²¹⁾の6か寺があげられ、さらにもう一つ、「江戸六地藏」と呼ばれている地藏像がある。

これは深川地藏坊正元が発願し、江戸市中から多くの賛同者を得て宝永5（1708）年から享保5（1720）年にかけて建立された銅造の地藏菩薩坐像で、製作者は神田鍋町の鋳物師太田駿河守正儀と明示されている。京都と同様、江戸に通じる街道の入り口に次の6か寺が建てられたが、現在は深川永代寺の地藏菩薩坐像は行方不明となっている。

- ①品川・品川寺：東海道 ②山谷・東禅寺：奥州街道 ③四谷・太宗寺：甲州街道
④巢鴨・真性寺：中山道 ⑤深川・霊巖寺：千葉街道 ⑥深川・永代寺：水戸街道

5

地藏菩薩の多くは色々な名号（名字）を持っている。その名彙を様々な要素で次のように分類している⁽²²⁾。

- (1)現世利益に関するもの ④諸願（延命・招福）
- (2)現世利益に関するもの ⑤身代わり（救難・加勢）
- (3)現世利益に関するもの ⑥子授け・安産・子育て
- (4)現世利益に関するもの ⑦疫病除け・治病祈願
- (5)祭祀・願掛け・願果たし方法などに関するもの
- (6)卜占・予兆などに関するもの
- (7)怪異・霊異現象、奇行・祟り・懲罰に関するもの
- (8)向いている方角などに関するもの
- (9)在所（地名）・山号・寺号・人名などに関するもの
- (10)形状・色彩・数などの外形上の特徴に関するもの
- (11)出現・創祀伝説などに関するもの
- (12)追善供養に関するもの
- (13)その他のもの

そして、この他にも名号（名字）のない地藏が無数にある、としている。

これだけ多くの呼び名を持つ地藏菩薩は最も身近で、「親しみ深い菩薩であり、中世後期から近世にかけて様々の民俗信仰と習合し、本来の経説の枠をこえた独特の信仰を形成する。いわば地藏信仰の民俗信仰化だが、その場合、地藏を子どもの守護神とするなど、地藏と子ども

もをむすびつけた信仰形態が、特徴的に認められるのである。」⁽²³⁾

また、『今昔物語』地蔵説話では、地蔵はほとんど例外なく、「小さき僧」「若き僧」の姿であられる。こうした地蔵と子どもの通有性が、地蔵は特に子どもを守護するという観念の最大の基盤になったと思われるが、地蔵が子どもの姿を借りるとは、地蔵經典に記されていないし、中国の地蔵説話にも認められないから、そこに、なんらかの日本的な理解が伏在していると考えべきだろう」と指摘している⁽²⁴⁾。

しかしながら、ここに今日一般にいわれている「お地蔵さまは子どもを守ってくれる仏様」の源流をみることができよう。そして、地蔵が子どもの守護神であるという信仰を代表するのが西院（＝賽）の河原の物語である。賽の河原の思想が最初に現れるのは室町時代の御伽草子の『富士の人穴草子』『月日の御本地』であり、このような思想を基にして今日一般に知られている『西院河原地蔵和讃』が近世初期に形成されるのである⁽²⁵⁾。

我が国においては、この地蔵菩薩を媒介として地域の子どものためのお祭りともいえる地蔵盆という行事がある。通例 8 月 22 日から 24 日（関東は 7 月 24 日）に行われる。この由来縁起や歴史を誌したものが案外見当たらない、としながらも、江戸時代から始められてそれも所謂上方方面に限られていたと憶断するとしている⁽²⁶⁾。

地蔵盆は、大きくは 2 つの形態があり、一つは先に述べた六地蔵へお参りする「六地蔵巡り（六地蔵参り）」であり、不特定多数の人が自分の意志で参拝するものである。もう一つは、一定地域（例えば町内など）内の路地や辻に祀られている地蔵の前で、莫産等を敷きそこで町内の子どもが遊んだり、数珠まわし（百万遍）をして町内の住民の無病息災を願う所謂「地蔵盆」である。ここでは、後者について述べていく。

地蔵盆のイメージを明確にさせるために当日のプログラムを示しておきたい。

《A 町》

第一日目（土曜日）

9:30 読経・数珠まわし
10:30 御詠歌
15:00 福引（子どもの部）
16:00 カレー作りお手伝い（小学生）
18:00 カレーライス会食
19:30 花火大会

第二日目（日曜日）

10:30 子ども紙芝居劇場
11:30 昼食（ハンバーガー）
14:00 宝探し大会
15:00 福引（家庭の部）
19:00 盆踊り大会

※両日とも 10 時と 14 時前後におやつをいただく。ただし中学生には図書券

《B 町》

8 月 22 日

13:30 数珠まわし

8 月 23 日

11:00 ヨーヨー釣り

| | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 15:00 | 人形劇 | 13:30 | 輪投げ |
| 17:00 | 子ども福引 | 17:00 | 家庭福引 |
| 19:00 | ビデオ鑑賞 | 18:00 | お供物渡し |
| | | 19:00 | ビデオ鑑賞 |

※両日とも10時・15時前後におやつをいただく。

地藏盆は本来的には8月22日から24日に催すのであるが、最近では世話をする大人も勤めている場合が増えて来ており、みんなの集まりやすい日にということで休日に催すケースも増えて来ている。その点では宗教的理由より町内の親睦や休日重視の方向に変化しており、地藏盆という宗教行事のとらえかたの変化が見られる。しかし、一方では、この宗教的行事である地藏盆に関して、その費用は、①町内会費・自治会費からの補助②住民一般・篤志家からの醸出金ないし寄付金③お供え(金銭)で、これらのいずれか又は複数の組み合わせによって賄われている⁽²⁷⁾。

ここで、注目すべき点は、一般的にみた場合、仏教行事である地藏盆の運営の費用に、公費と思われる町内会費や自治会費から補助金が出されている点である。これはまさに地藏盆が、それぞれ文化と伝統をもちそれを伝承してきたその地域に根付いていることのあらわれで、仏教行事の地藏盆が地域における子育て行事の一つとして位置付き、同時に子育て・健全育成の機能を果たしていることの表れといえる。

地藏盆は、地域それも町内単位という比較的狭い範囲で行われる仏教行事の祭りである。と同時に、行うのはその町内の大人であり、しかも自主的に町内の子どものために毎年行われるのである。子どもにとっては、生活の最も基礎的な単位である町内というものを再認識し、さらに帰属意識を持つことが出来る。大人にとっても、これを機会に自分達の町内の子どもの健全育成の一端を自分達が担っているという、子どもとの直接的な触れ合いとなるこの行事(地藏盆)を通してその自覚を高めて行く。

先に述べたように、今日の児童健全育成は、その施策の方向が、育成環境の設定を例えば公園・遊園・児童館等目に見える環境整備・設定に向いている傾向があると思われるが、それよりも重要なことは、地域の子どもの地域の大人が育てる、という意識を醸成することであり、それが今日の児童の健全育成の基本とならなければならないのではないだろうか。町内は、それぞれがそれぞれの文化と伝統を持って、それぞれの時代を送りそれを伝承してきた。この伝承の作業こそが所謂コミュニティを形成していくことと大きく関わっているのではないかと考えられる。

本論文は、平成11年度佛教大学特別研究助成による研究成果である。

引用及び参考文献

- (1) 拙稿「児童の権利と健全育成に関する一考察」佛教大学『社会学部論集』第26号 1992年12月 p. 60
- (2) 金田一京助他『新明解国語辞典』
- (3) 同上
- (4) 足利量子他編集『医療福祉・地域福祉』中央法規 1990. 4 p. 107
- (5) 同上 p. 108
- (6) 同上 p. 108
- (7) 同上 p. 108
- (8) 吉田 栄他編集『児童福祉』中央法規 1990. 4 p. 26
- (9) 同上 p.27
- (10) 厚生統計協会『国民の福祉の動向1998』1998. 10 p. 27
- (11) 吉田 栄他『前掲書』p. 168
- (12) 厚生統計協会『前掲書』p. 124
- (13) 乳児院積慶園20周年記念誌『虹のかけはし』
- (14) 「積慶園だより」第82号平成9年春季号 第92号平成12年夏季号
- (15) 速水 侑『地藏信仰』塙書房 1996. 6 pp. 18～19
- (16) 同上 pp. 41～42 163
- (17) 眞鍋廣済『地藏尊の研究』富山房書店 昭和50年1月 pp. 50～51
- (18) 同上 p. 51
- (19) 速水 侑『前掲書』p. 77
- (20) 同上 p. 63
- (21) 眞鍋廣済『前掲書』p. 103
- (22) 石川純一郎『地藏の世界』時事通信社 1995. 9 pp. 48～52
- (23) 速水 侑『前掲書』p. 152
- (24) 同上 p. 158
- (25) 同上 p. 153
- (26) 眞鍋廣済『前掲書』p. 111
- (27) 石川純一郎『前掲書』pp. 181～186

（はやし としみつ／社会福祉学科）
2000年10月18日受理